

46.20200605 “木を切らないことが、森を破壊する。”

東京農業大学 森林総合科学科 宮林茂幸教授の所見から

1. 日本には2500万haの森林があり、1500万haは全く人の手が入っていない天然林である。1000万haが荒れている森林である。これは人工林の面積に等しい。
2. 日本の人工林が荒れた理由は3つある。
 - ① 1950年代の電源開発法…ダム建設で山間部の森林が水底に沈んだ。
 - ② 戦争中のエネルギー政策…無計画に森林を伐採して薪や炭にすることで150万haの森林が消えた。(これは四国の面積に匹敵する。)
 - ③ 戦後の植林…国民も疲弊していたが、森林もぼろぼろになっていた。1951年から1974年のオイルショックまで、日本は国策として植林作業によって緑の造成をやってきた。このとき植えたのがスギとヒノキを中心とした針葉樹だった。もともと日本の、特に本州の山林は広葉樹だったが、そこに針葉樹を植えることで生態系が変わってしまった。
3. なぜ広葉樹でなくスギ、ヒノキの植林になったのか？
広葉樹は薪炭林として活用されていたが、エネルギー転換により薪炭は売れずガスや電気にとって代わられた。一方で戦後の急速な復興による都市拡大で、住宅建設のための木材の需要が拡大しスギ、ヒノキ、カラマツなどが植えられた。
4. 1951年に植えられた木は当初計画では50年後に伐採する予定だった。
1961年に木材の輸入が自由化され、安い外材が入ってきて、日本の木材は売れなくなった。このため山の手入れをする動機がなくなってしまったので、日本の山は荒れてしまった。
5. 針葉樹林の手入れ…苗床3年
 - ① 山に植林する前に苗を育てるのに3年かかる。植林してからも、10年間は6月と8月の年2回、下草刈りが必要である。木の成長よりも周りの草の成長が早いので、これをやらないと、日があたらなくて木が枯れてしまう。
 - ② 10年目からは毎年の枝打ちとなる。3寸(9cm)角の無節(むぶし)の材を取るためにはビール瓶の太さになるまでに枝打ちをしなければならない。これを怠ると、節ができてしまい、木材としての価値がさがってしまう。
 - ③ 15年過ぎからは、10年おきをメドに間伐を行う。15年、25年、35年ぐらいをメドに間伐を行い、最終的には1ha当たり2500～4000本植えたものを、50年間に300～600本程度まで減らし、材として利用する。
 - ④ 1950年代に植えられた木は、今まさに利用される時期にきているはずだった。
 - ⑤ 木は最初は上に伸びるが、15年ぐらいから横に育ち始める。そのため最初は蜜に植えることでまっすぐ上に伸び、成長してきたら枝打ちして間伐で間引くことで、真っ直ぐで太いいい材がとれる。
 - ⑥ 間伐が金銭的に見合わなくなってしまったため、山林の多くは1970年代から1980年代にかけて保育間伐が行き届かず、もやしのような細い木ばかりになってしまった。台風な

どでドミノ倒しのように木が倒れてしまうのはそのためである。

- ⑦ また木が密集して光が入らないので、下草が育たない。針葉樹だから葉も落ちない。葉を分解する微生物も育たない。生命の多様性がないから、木の下に土壌が育たない。
- ⑧ 大雨などで水がそのまま流れ、表土も一緒に流れて、土石流などの災害の原因になる。

6. 人工林は山を守れない「緑の砂漠」

- ① 森林は本来、水源涵養機能を持っている“緑のダム”みたいなものである。しかし今は保水機能のない、緑の砂漠になってしまった。
- ② その原因は木を切らなかったことにある。「木を使わず、山を荒らす」これは人類史上初の由々しき事態である。
- ③ 50年伐期の計画を80年伐期の森として利用することを主張しても、間伐したところで、その材が収益にならないので、農家にとっては全くメリットがない。
- ④ 上流で木を切って、下流で利用するというサイクルが機能していたときには上流で自然に行われていた山の手入れが、下流の生活を守っていた。政策だけが悪いのではない。経済性を優先して日本の山の木を計画的に使わない、下流にいる企業や、都市生活者である我々も原因の一端である。

7. 日本で木を利用するためには

- ① 山で食べていく上では経済性がもっとも問題である。1m³当たり2万円ぐらいになれば何とか林業が成り立つ。
- ② パルプなんて、国産材を使えば2000円で作れる量をわざわざ12000円で外国から買っている。
- ③ 1本の木を柱とパルプの両方に加工すれば、1m³当たり14000円ぐらいになる。
- ④ 国産スギは1m³当たり8000円であるが、80年間使える建材になる。米国産のツガ材は17000円もするが、耐用年数も短い。また外材そのものが気候風土に合わないため、水周りでは外材は10年も持たない。
- ⑤ 日本の建築基準法改定(1987年)で、住宅耐用年数は26年である。住宅メーカーからすれば、耐用年数以上に長持ちする家を建てるよりも、耐用年数がきたら、家ごと買い換えてくれるほうが大量生産・大量販売できるので都合がいい。このため大量に均質な材が買える外材を使うほうが楽である。
- ⑥ 国産材の弱みは、搬出コストが木材価格の3分の2を占めており、なかなか均質のものを大量に生産できない。
- ⑦ 上流で本物を作り、下流では本物を買って、森林を上流と下流で共有するという流域社会の概念を実現させたいものである。

以上